

《手書き－1》

社会福祉サービスとしての要約筆記を考える 吉川雅博氏

吉川です。聴覚障害児の発音訓練で聴覚障害の分野に入った。そこに7年、その後、名古屋市の総合リハビリテーションセンターで、脳卒中後遺症による失語症患者の言語訓練を担当。同時に、身体障害者更生相談所で、聴覚障害や言語障害の方の身体障害者手帳交付の仕事もしていた。そのあと東京都の障害者更生相談所でも手帳の仕事に携わる。聴覚障害の分野に20年もいたので、聴覚障害が専門ともいえる。だから、要約筆記者の皆さんとも近いかと。しかし、今日は聴覚障害の話ではない。

大学での私の所属は社会福祉学科。言語聴覚士（ST）の資格をもつ。大学では障害者福祉論、社会福祉関係の講義をしている。大学以外にSTの養成校にも非常勤で行き、聴覚障害の科目を担当。

今日は社会福祉の話。狭い範囲での聴覚障害の話ではないが、日本の社会福祉の動きを勉強する機会にしたい。レジュメに沿って進める。

I はじめに、に書いたのは、いただいた会報の一部を写したものの。(1) 要約筆記者の到達目標として、①～⑤までがあがっているようだ。

評価点：話し手の経歴、特に聴覚障害分野への関わりに関して正確につかめていること、だからこの日招かれたが、講演テーマは聴覚障害でないこと、ここまでが前半の要旨。次に、現在の職務と担当科目。言語聴覚士がSTであることは必須の知識。講演の本題に入るところでは、聴覚障害の話ではないが、社会福祉は学ぶ必要があることに言及。レジュメの要約筆記者の到達目標と絡めている。ここでは番号をレジュメどおりに振ることと、その番号で何を述べたかがポイント。

《手書き－2》

話が通じない人の思考 養老孟司氏

養老です。1937年生まれで、小2で終戦という世代。大学紛争時は助手1年目だった。65で本が突然売れた。人生はわからない。売れたのはコミュニケーションの本と思われたから。いつも言っていることを書いただけ。

売れた理由の1つはタイトル。20年前に書いた本の言葉を編集者が覚えていた。商売になりそうなフレーズ。新潮新書を出すにあたり著者の1人に入れてくれ、題は決めてあった。この題が当たった。2つ目に語りおろし。自分で書いたものは売れなかったのに。書いた後藤さんも若い。語りおろしが受けるのは、地下鉄車内をみればわかる。周りじゅう携帯でメール。若者はメール文がうまい。彼も笑わせるメール文。メールはおしゃべりのようだが文章。

会話のような文章は口話体という。古くは言文一致体という。明治期、離れすぎた文章語とおしゃべりを一致させる言文一致運動が起きた。明治の文豪は言文一致体で書いた。その言文一致体が口話体から離れてきた。メールは会話体に近づけるもの。いま起きているのは下からの言文一致運動。

だから、メール文が受ける。文章修業して文を書いても、読む人には文語と敬遠される。世の中のニーズは話しことばに近づいている。

評価点： 自己紹介として、どんな世代であるかを社会背景と絡めている。年数より、終戦時と大学紛争時の本人の状況が書かれていることが必要。その後、突然、本が売れたこととその理由を述べている。理由の1つ目。タイトルの良さとそれに至った経過、2つ目の語りおろしの文体とメール社会でのメール文への言及が書き分けられていることが重要。2つ目の理由の背景を説明するために、明治期の言文一致を持ち出している。現代のメール文も口話体へ近づけようとするものだとの見方がポイント。

社会福祉サービスとしての要約筆記を考える 吉川雅博

社会福祉の理念です。2番のところ。

社会福祉基礎構造改革です。構造改革は小泉首相とセットみたいに言われる話。社会のいろんなところで構造改革が進んでいる。代表的なのは郵政民営化、反対した議員が復党と話題に。あれも構造改革の一環。道路公団民営化も。構造改革に聖域なく、福祉にも構造改革のメスが入っている。

改革は平成9年ころから。平成12年は介護保険開始。介護保険は日本の福祉を考えると画期的。後で説明する。平成9年議論が始まり、12年から実践された。その資料を後ろにつけた。P4に1ページ分。社会福祉基礎構造改革の資料。ここまでの資料を見るのは初めてでしょう。これは厚生労働省のホームページからコピー。1に、改革の必要性とある。福祉での改革の理由が書いてある。左に福祉を取り巻く状況。子供は少なく、老人は増える状況。低成長経済も間違いない。国民意識も変化。生活の安定を支える社会福祉制度への期待もある。そういう認識です。

右は社会福祉制度。これも知っていてほしい。日本の福祉制度は、終戦直後昭和25、6年に身体障害者福祉法も含め整備された。それから全く変わっていない。

評価点：出だしで社会福祉基礎構造改革に触れて、エピソードとして小泉首相と郵政改革の話がされている。構造改革は福祉分野も例外ではないという話に戻しているかが重要。そのあとはレジュメ記載以外の話が含まれると内容が厚くなる。改革の検討は、平成9年からスタートしていることや介護保険は日本の福祉では画期的であることなど。後ろの資料が厚労省のものであること、資料の記載事項の説明は、余裕をもって入力できる部分。最後の「日本の福祉制度が戦後大きな変化がない」ところまで、基礎知識があれば正確な文章になる内容なので、文章の正確性も評価対象としては大きい。

ひきこもりゼロの社会は作れる 渡邊幸義氏

／障害者雇用は企業ビジネスとして成り立つか、疑問に思う人は多いのでは？
／我々は10大雇用を3割やっているが、競合他社はない。時間がかかるから。ヨーロッパでは競合があり、障害者を一定の率で雇用。たくさん雇えば教育にお金がかかるからディスアドバンテージ。だが誰かがやらなくてはならない。引きこもりの親と関わり、私がやるべきと思った。引きこもりの原因は、社会の仕組みが生み出しているから。私は幸せな気持ちで、やりがいをもって人生を送っている。これは社会の仕組みが私には良かったから。だれも悪い環境を作ろうとしていないが、1つの仕組みについてこられない人もいる。短期的に収益を上げる会計システムもそう。うつになってリストラされたりもする。親は70過ぎ。子供は30～40代。その年で発症し引きこもりに。これを無関係といえない。自分は幸せでも、数%絶望を持つ人がいる。自分には責任があると思い、法定雇用ではなくやってきた。最近はさらに思う。引きこもりを救えるのは、国でも親でもなく企業。家から出てトレーニングを積ませる。全企業がやれば競合になる。引きこもりがなくなる。1%、従業員1000人なら10人引きこもりを受ける。人口の割合分を受けるのが大事。私は静岡の沼津で育った。近所には愛想が悪いおじいさんがいた。アスペルガーだった。裏の子供は軽い知的障害だった。地域ではうまくやっていて精神的にも安定していたように思う。今、社会は隔離され、人はばらばら。会社で自分と違う人に会い、相手の弱みを助ける本能を出せる。そんな社会環境にするのが企業。我々は先駆的にやっている。そういう会社が出てほしい。

評価点： 質問では社会の一般的見方を出して、本題の答えを引き出している。話者の答えが本論として展開。障害者雇用には負担があるがヨーロッパでは競合企業がある現状と必要性があることを述べている。この取り組みをするきっかけと理由、社会の仕組みに適応しにくい人の存在と責任感が盛り込まれているかがポイント。引きこもりを例に、従業員数の比率で雇用すべきと持論を展開。子供時代、障害者を地域社会が受け入れていたことと現在の隔離状況に触れ、企業の取り組みに期待をつなぐ流れが盛り込まれていること。